

図書館たより

号 数 第 83 号
発行日 昭和63年12月20日
編集者 島根県立図書館
発行所 松江市内中原町52
TEL(0852)22-5725
印刷 島根印刷株式会社

島根は読書活動の先進県

島根県読書推進運動協議会長 岡 正

本県出身で日本を代表する木版画家の平塚運一氏は、米国メリーランド州に住まい、92歳の現在も第一線で活躍しておられる。本県が全国一高齢化の進んでいる実情は、若い人が県外に流出する結果であり、それが活力不足をもたらしていると嘆く声も多い。しかし、本県から有為の人材が輩出して国の内外で活躍していることも、郷土の誇りである。

島根県は人材養成の場としてすぐれ、その基盤を培う教育の面では先進県であると認めているのは、あながち県内の教育界ばかりではないようだ。

もとより、教育とは学校だけでなく、家庭も地域も連携し、生涯にわたって学んでいく営みであり、その生涯学習の支柱となっているのが読書である。

島根県学校図書館協議会から全国読書感想文コンクールに応募した作品が毎年のように全国入選しているが、こんな例は珍しい。私が会長として東京の授賞式に参列した折、感心した全国審査の先生からその理由を尋ねられた。「読書の裾野が広いから」と答えたが、校内審査した作品群が市郡審査を経て県審査で厳選されるのだから、全県の児童・生徒が読書し、このコンクールに参加したことになる。

県下各市町村立の図書館活動は近年目覚ましいものがあるが、本館報の「公共図書館めぐり」に毎号紹介しているので省く。各公民館の地域に根ざした読書活動は多様だが、その熱意には感服する。

また、県読進協が県立図書館と共同し昭和54年度から始めた幼児対象の「親子読書」は、親御さんや

県立図書館・各市町村の読書普及担当者、各幼稚園・保育所の職員、ボランティアの方々の御尽力で県内一円に定着している。昭和59年度からは小学生対象の「子供読書」にも取り組んだ。これは親子読書の継続発展であるだけに、着々と広がりつつある。

このほか、地域に密着した小さな文庫活動や婦人中心の成人読書会が各地に続々と生まれている。

さらに、島根県読書普及振興計画に基づく事業で県立図書館の情報・資料センターとしての機能が、近年一段と飛躍してきた。とりわけ、昭和61年4月に西部読書普及センターが浜田市に開所した意義は大きい。これで、県西部の遠隔の地にも県立図書館の自動車文庫巡回や図書貸出しが敏速になった。

こうしてみれば、読書施設の面は次第に整ってきたものの未だしも、読書活動に関する限り島根県は全国水準を抜く先進県といえるのではなかろうか。

明治初年、全国10か所に書籍縦覧所が設けられたが、その中でも明治6年10月開所の松江書籍縦覧所は日本で最も早い公立図書館であった。この先覚者に倣い、我々は生涯学習を一層充実させるためにも読書活動の実績を更に高めていきたいものである。



木次町立図書館

大原郡木次町大字木次153
TEL (08544) 2-1021

町立図書館の誕生は、たいへんユニークでした。それは、検察庁が移転したあとの庁舎を利用して誕生したことです。いまひとつは、町民に寄贈を依頼して集った寄贈図書1,656冊と購入図書57冊、合計1,703冊の蔵書で昭和41年12月に開館したことです。開館初日の来館者は、青年2名、中学生5名であったと記録されています。当時、蔵書は館内閲覧のみで館外貸出しは一切しなかったのです。

昭和46年8月、公共職業安定所移転後の建物に移転しました。町なみに移転したこともあって来館者は3倍に増えましたし、蔵書も7,309冊になりました。また年間11,179冊の貸出しをみるようにもなりました。この移転を契機にして、人口1万8百余人の町の図書館の運営は本格的になりました。

寄贈図書96.7%で出発した図書館の蔵書は、新鮮で魅力ある蔵書構成が必要である町立図書館にとって大きな問題でした。その問題点を解消するために昭和55年に町教育委員会で図書廃棄処理委員（6名、任期1年）の任命があり、その委員会で図書廃棄基準（除籍並びに事務処理を含む）の審議決定がなされました。それに基づいて廃棄処理委員会で廃棄図書の選定が行われ、職員が除籍作業を実施したのでした。その前後から、寄贈図書と購入図書との比率が逆転したのです。

ちょうどそのころ親子読書活動は、県モデル指定活動の第2年目の活動に取組んでいました。親子読書活動をはじめたのは、昭和53年。翌54年に県モデル指定活動の口火を切ることになり、町内全幼稚園児、全小学校1年生を対象に取り組みました。小さい火は消えやすい、燃やすなら大火をとという考え方から町教育委員会、町内全幼稚園・小学校、図書館がスクラムを組んで取組みました。「親子の心のふれあい」「子どもの豊かなことばと心を育てる」ことをねらいに親子読書活動を進めて、いま11年目を迎えています。それによって「牛にひかれて善光寺参り」という現象が起りました。10年前に比べて来館

者が一般成人は3倍、中学生は3.4倍に増えました。継続は力なりと思う昨今です。

親子読書活動の発展活動としての子供読書会は、モデル子供読書会を育成して、その波及効果をと、昭和59年末1グループの子供読書会の発足をみましたが、1年余りで挫折。“あつものに懲りてなまさを吹く、ような取組みで60年末に1グループの発足を行いました。そのグループは、いま4年目、その経験をふまえて、さらに62年に1グループ誕生して今日に至っています。

戸外での読書会のようす



図書館より遠隔地の町民の身近かに本を届ける方法として公民館に配本しています。図書館に近い館を除く4館に1館当り300冊の配本です。同じ考え方から、59年に地域子供文庫（1セット70冊の文庫）を5セット創設し、子供読書会への貸出し、公民館での活用をはかっています。

町民の図書館への理解と利用の促進を願って館報「としょかん」を、61年4月発刊しました。それから毎月1回、町内全戸に配布して今日に至っています。館報を手にも本を借りに来る高齢者、館報掲載の本をリクエストする婦人、毎月の新着本紹介が楽しみと語る中年の人など図書館への関心の高まりがみられ、成人利用の向上を促したようです。この館報も新年度は、いまと同じスペースのまま、町報に入れていくということが検討されています。

昭和63年度読書普及研修会講演要旨

子ども心に学ぶ

神戸市立霞ヶ丘小学校 鹿島和夫先生

昔、「デモシカ先生」という「先生にでもなるうか、先生にしかなれない」と、教師をバカにしていたのですが、私はいま教師になって良かった、教師の仕事が楽しいと感じています。その良さというのは、子供達の様子を見ていただけたら理解してもらえらると思います。

国語の勉強の時間に、しっぽの役目について教えていました。子猿のしっぽは果物をもぎとるのに役立ちます。一体お母さんの役目は何なのでしょう。さなえちゃんは「先生、うちのお母さんの役目は服を買うことで〜す」と言いました。一年生の教室というのは、教師の投げかけによっていくらでも楽しい雰囲気の世界がつかられるわけです。

僕は子供の心を感じるために、子供にものを書かせて、教師とのふれあいをもとめています。そうすると授業の中でわからない子供の姿が見えてくるんです。僕が現象的な面で見ている子供からではなく、子供の内面がいっぱい書いてあるものから見えてくるんです。

恋物語の作品があります。最近の一年生の子はすごくオープンなんです。きょうこちゃんの恋物語では、きょうこちゃんは、ふなちゃんが好きでした。だけど、ふなちゃんは、まさこちゃんの方が好きだったんです。きょうこちゃんは、ふられてしまったので先生どうしたらいいのという作品があるんです。きょうこちゃんは、しかたがなくふなちゃんを忘れてしまって、田中くんへ移るわけです。

それから写真をとっているということなんです。何でとるかということなんですけども、実は、子供をよく見つめておきたいということなんです。僕は個人内対話と言っているんですけど、そういう対話を子供にしたいんです。ファインダーの中で動いている子供を見つめると、僕の知らない世界を子供はいっぱい見せてくれるわけです。

「はだかで歯をみがくと / チンチンがゆれます」という詩があります。谷川俊太郎さんの「はだか」という本があるんですが、あれを見たらこれも子供の感性と同じだなあと思ったりするんです。谷川さんというのは、子供の心をもった詩人やなあという感じをもったんです。ああいう発想というのは、なかなか僕達にはわからないですよ。やはり、まわりにそういう感性をもった大人がいなかったらだめになると思います。

子供の表現にはおもしろいものがあります。「おじいちゃん / はげちゃびんやのに / おふろにしゃんぶうもっていく」たった3行の中に子供の凝視する眼があるんです。

「ふたりのおばあさんがはなしをしていました。むかしは親孝行したときには親はなしだったけど、いまは親孝行したくもないのに親はいるだね。もうひとりのおばあさんもさびしそうに笑いました」孤独な暮らしをしている老人の会話を、これは何かの暗示じゃあないかと思ってキャッチした子供の感性があり、それを僕との関わりの中で書いているんです。

なるおたかすみくんには「うんこ」という作品が、また、なかむらあきひろくんには「たたり」「家出ごっこ」という作品があります。

僕がさまざまに子供にものを書かせてみますと、子供の悩みがきちっと示されてくるんです。そういうことが教育の中で一番大事な問題ではないかと思えます。今、いじめとか校内暴力とかいろんな問題が出ていますけれど、そういう問題をつきつめていきましたら子供の悩みが、先生に受け入れられていないことが多いと思います。

そんなことでいっぱい、いっぱいふざけたことを書いているんですけど、僕が知っているのは人間をみつめなさいということです。だから僕のクラスの子供達には、人間を描いた作品がいっぱいあるわけです。

最後に、ダウン症のべっぴんちゃんの話ですが、マラソン大会に参加して、快挙をなしとげたという最高のドラマがありました。みんなと同じようにマラソン大会に参加して、もちろんビリだったんですけど、この事実がお母さんにとっては、奇跡の一日だったんです。「よし子が帰ってきた時、一番ビリの順位だったかも知れないけれども、わたしにとっては何にもかえがたいものである」とつぶっています。

一人一人が、本当に感動的でそれぞれ豊かで健康的におくられたらいいなあと思う。そんなために教師はもっともっと一人一人の子供のために、ふれあうような仕事をしていかなければならないことを僕は感じています。

(この要旨は編集部において要約したものです。)

いつの間にか9年になりました

私達は東出雲町内の一地区の、小さな集まりです。

そもそもの発端から10年目をむかえました。会員は常に15名前後、毎月第3水曜日夜と決めて、以来1回の休みもなく続いています。本の数は皆様で計算してみてください。今までの経路を簡単にのべます。

○54年10月 旧意東村役場が意東公民館となり、町中央公民館から毎週水曜日移動図書が来る。

○55年4月 福頼公民館長、石倉主事補、読書好きの新見さん、筆者とが読書会発会のため再々話合う。

○55年6月 めでたく読書会発会、会員17名、講師に相田ちか子氏を招く。

○56年3月まで 講師助言者に、小学校長、社教主事、町内学識者、地区長老を迎える。

○56年4月～58年3月まで 小学校長吉松先生に毎月助言を受け、時に選本を依頼、会員自費購入。

○57年4月 館長他1人男性会員参加。

○58年4月以降は折々講師助言者を迎える。

私達のグループが契機となり、子供読書会が誕生し、お母さんの読書会が分家をして巣立って行きました。年令層は、40才代から70才代と高くなりまし

たが、男子会員の女性には気づかないうけとめ方や、感想を聞き大変な勉強になっています。時には読書を離れた話題に終始する事もあり、子供の事、家庭の事、社会の事と遠慮なく話し合い、ストレスの解消の役割も果している様です。10年近くも続いた事は、読書会での話し合いを決して外に洩らさない事を鉄則としている事でしょう。そして、会員の一人一人が「出てきてよかった」と感じて帰るように、努力している事だと思います。

最後にお知らせしておきたい事は、毎年の公民館まつり(文化祭)に参加して、図書室で独自の展示をつづけています。地域から失われていくもの、消えゆくものへの記録と、呼びもどしへの願いをこめて、地区の方達に心のおくりものを続けていこうと願っています。57年、県立図書館より国語読本を借りて展示。58年、「ふるさと山野草展」、60年「ふるさと散歩道」地区の歴史、民話、神社仏閣代表地点の写真展。61年、意東地区子供の遊び歳時記を絵巻にする。62年、「童謡を見なおしましょう」童謡の歴史を年表に。童謡百選の小冊子作成。63年、「昔の花嫁衣装展」明治初期～昭和30年代。これからは書ける読書会として文集作成に頑張っていきたいと思っています。

読書会グループ紹介
私達のグループと読んだ本
読書会つみくさ

NEWS

☆島根県読書推進運動功労者の表彰(12月16日)

島根県読書推進運動協議会では、今年度も読書推進運動のために尽くし、顕著な功績があった3団体(うち1団体は中央表彰)1個人を表彰した。受賞者は次のとおり

中央表彰

○団体の部

相生読書会 (浜田市)

県表彰

○団体の部

1. 読書会「つみくさ」(東出雲町)

2. 読書会「沙羅の会」(津和野町)

○個人の部

大野暁江 (弥栄村)

☆県立図書館こどものつどいの開催(12月11日)

幼児と小学校低学年1～3年生を対象とした恒例のこどものつどいを、エプロンシアター「三びきのやぎのがらがらどん」・きりえOHP「かみなりむすめ」・人形劇「ばけくらべ」を中心に開催した。午前中は橋北、午後は橋南の子供達が集まり、150名

あまりの参加者があった。

☆昭和63年度読書普及研修会の開催(11月13日)

読書週間にちなみ11月13日に県立図書館学習室で神戸市立霞ヶ丘小学校から鹿島和夫先生を招き、「子供の心に学ぶ」という演題で開催した。講演は鹿島先生の著書を中心に、子どもたちとの交流の場面を熱っぽく語っていただいた。約150名の参加があった。

なお、講演要旨は3ページに掲載している。

